

# 教職科目「生徒指導」の指導内容について（その1）

## －生徒指導の意義について－

農業科 高柳真人

### 1. はじめに

1988年の「教育職員免許法」一部改正に伴い「教育職員免許法施行規則」が改正され(1989年)、1990年4月より教職専門教育科目の内容が改訂された。そこでは、「教職に関する科目の単位の修得方法(第六条)」として「生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目について修得するものとする」ことが規定されている。原野(1993)は生徒指導等の科目が教職科目として取り上げられるようになった理由として、「教科の学習・教授中心の教育から、生徒の人格完成、人間形成重視の教育への転換」を挙げている。「人格の完成」とは、教育基本法第1条に示された教育の目的そのものでもあるが、学校教育において、教科指導と並んで、在り方生き方に関する指導の重要性がますます認識されてきた今日において、生徒指導等の科目が教職科目として取り上げられることには、十分な意義と必然性が認められるものである。

本研究では、「生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目」のうち、「生徒指導」で扱うことが適切かつ必要であると考えられるテーマを設定し、その指導内容について検討を加えたものを報告することを目的とする。検討する視点は、そのテーマや内容が、教職を遂行する上で役立ち得る知識となるものであるということである。このように「生徒指導」の指導内容について検討を加えることは、教職課程における「生徒指導」の指導のあり方を考える上での一助となるとともに、現代の教育の抱える諸問題を解決するための視点を提供するものと思われる。特に、本稿では、テーマとして「生徒指導の意義」を取り上げ、その指導内容を考察することとする。

### 2. 生徒指導の意義

「生徒指導」の指導に当たり、まずは学習の対象となる生徒指導の意義を明らかにしておく必要があると考えられる。このことは、「生徒指導」を学習するうえでの導入の役割を果たすとともに、教職に関する理解を深めることにもつながるものである。教職において、学習指導は重要な職務となっているが、教師は教科の知識や技能に堪能であると同時に、生徒理解や人間関係が深まることで指導の効果があがることを知っておくことも必要

なことである。また、教師は教科担当者としてだけでなく、HR担任などの校務分掌担当者としての職務を遂行することも重要な任務となっており、校務分掌の理解や校務分掌遂行の円滑化に関わる知識を学ぶことができるなど、生徒指導を学ぶことには深い意義が認められるといえよう。

尚、意義といった場合、一つには、定義に関わる「意味」という意味合いと、存在理由に関わる「重要性」という意味合いが含まれると考えられる。この両者を考慮に入れて検討を加えるものとする。

#### (1) 生徒指導と生活指導

文部省『生徒指導の手引き(改訂版)』には「周知のように、『生徒指導』に類似した用語に『生活指導』という言葉があり、この二つは、その内容として考えられているものがかなり近い場合があるが、『生活指導』という用語は現在かなり多義に使われているので、本書では『生徒指導』とした」という記述がある。この記述に示されるように、今日、学校において、生徒指導という言葉と生活指導という言葉が併用されている。両者の意義を明らかにすることで、生徒指導への理解が深まることが期待される。

そもそも、生活指導という語は、大正期の新教育や昭和初期の生活教育の中で使用されたものである。それは、子供の側から道徳や生き方を指導していくことにより伝統的な修身教授や訓練を方法的に改善していく試みとしての、或いは、生活綴方を基盤にして生活に根ざした生き方を作り上げる指導としての意味を持っていた。戦後になると「しつけ」を意味する語として、更に、生活綴方の流れを汲んで「仲間づくり」、「学級集団づくり」の中心概念として用いられる一方、アメリカのガイダンスの理論と技術が紹介された際、その訳語としても使われるなど、多義的に使われるようになった。例えば、飯田(1980a)は、従来用いられてきた生活指導の意義を以下のように分類しているが、その種類の多さからも生活指導という言葉の多義性が窺える。

(1) 道徳教育や道徳指導と同義だとするもの

(2) 日常生活におけるしつけ(訓育・訓練を含む)であるとするもの

- (3) 生活教育と同義であるとするもの
- (4) 生活つづり方的教育方法であるとするもの
- (5) 生徒指導と同義であるとするもの
- (6) ガイダンスであると解するもの
- (7) 特別活動であると解するもの
- (8) 「学級づくり」と同義であるとするもの
- (9) 集団主義教育であると解するもの
- (10) 教育と同義であるとするもの

一方、1949(昭和24)年には、文部省がアメリカのガイダンス理論や技術を解説した「中学校・高等学校生徒指導の手引き」を刊行する。この時、生徒指導という語がガイダンスの訳語として用いられた。このように「『生活指導』と『生徒指導』という用語は共に『ガイダンス』の訳語として使われ」(大西、1990)るようになり、概念の混乱を避けるため、文部省では生徒指導という語を用いるようになった経緯がある(例えば『生徒指導の手引き』、1965)。しかし「東京都では、生徒指導を伝統的に生活指導と叫んでいる」(大野、1997)例もあり、現在でも、両者が厳密に使い分けられていないというのが実情であろう。また、言葉のイメージからしても、生活指導という言葉は、生徒の日常生活の指導というイメージを与えやすく、わかりやすいということもあると思われる。いずれにせよ、現在の両者の使われ方について、大西(1990)は、生活指導を「一つはアメリカのガイダンス的な内容をもって言われる場合と、もう一つは集団づくり、集団の指導、個人と集団の指導というかたちで使われるようです」と言い、生徒指導を「生徒の問題行動の指導、生徒のいわゆる生活上の管理というかたちで使われている」とともに、「カウンセリングとか悩みごと相談したいなかたちで」使ったり、学級指導にも使う、「つまり、『生活指導』と同じ意味で使われる」という「いくんだ使われ方をしている」と述べている。生徒指導の意義を検討する際には、こうした背景を踏まえていく必要があると思われる。

## (2) 生徒指導の定義

江川(1994)は、「形式的に概念規定をすれば、生徒指導とは学習指導以外のいっさいの指導のことである」と述べている。現実の教育場面において生徒指導が様々な捉えられ方をしていることを考えると、こうした包括的な定義をすることにも意義が見いだせるといえよう。

文部省の定義では生徒指導を以下のように定義している(『生徒指導資料第20集』)。

「生徒指導とは、本来、一人一人の生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を

育成し、さらに将来において社会的に自己実現が出来るような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の生徒の自己指導能力の育成を目指すものである」

この定義によれば、生徒指導とは、個人が自己の可能性を最大限に開発し、実現して生きることとして理解される自己実現を指導・援助する過程であると捉えることができる。マズロー(A.H.Maslow)は、その欲求階層説において、自己実現の欲求が発揮されるためには、より低次の欲求が満足されることが必要であるとした。この考えに従えば、生徒の自己実現を助けるためには「承認の欲求」や「所属と愛の欲求」が満たされることが必要であるということになる。このことは、言い替えば、学校での人間関係の問題や生徒の居場所作りといった問題が自己実現と深い関わりを持つということである。すなわち、生徒が学校に居場所を持っていたり良好な人間関係が作れていれば、仲間から承認され、愛情を示したり示されたりできる、集団に所属している感情を味わうことができると考えられる。従って「生徒指導」では、これらの問題は、取り上げる意義を有する重要なテーマであるといえよう。

また、生徒指導の究極の目的となる自己指導能力とは、「その場その場で『どのような行動が正しいか』(判断基準は『他の人々の主体性の尊重と自己実現』平たく言えば、他人のためにもなり自分のためにもなること)を自分で判断して実行し、責任を取る能力」(坂本、1987a)、或いは「人間的価値の実現に向かって、自分で自分を方向づけるとともに、自己の直面する諸問題を自分で解決する」(江川、1994)能力のことである。教師による指導・援助による問題解決の進め方から、やがては生徒自身に問題解決能力が備わっていくことが期待されることになり、生徒の自己決定の機会が用意されることの重要性を示すものといえよう。

## (3) 積極的生徒指導と消極的生徒指導

生徒指導の定義と関連して、積極的生徒指導と消極的生徒指導の問題がある。文部省『生徒指導の手引き(改訂版)』(1981a)には以下のような記述がある。

「現在の学校教育、特に中学校や高等学校の教育において、生徒指導の充実、強化が強く要請される根拠として、青少年の非行の増加・年少者・生徒の増加、粗暴化、集団化の一現象とそれに対する対策があげられるが、生徒指導の意義は、このような青少年非行の対策といったいわば消極的な面のみにあるのではなく、積極的にすべての生徒のひとりひとりに

とって、また学級や学年、さらに学校全体といったさまざまな集団にとっても、有意義に興味深く、そして充実したものになるようにすることをめざすところにある。このような目標を忠実に追求していけば、それは自然に非行化の防止としての効果をおよぼすことになるのである」

文部省『生徒指導資料第20集』にも、この考え方を踏まえたと思われる以下の記述がある。

「従来、校内暴力やいじめ問題が大きな社会問題となる中で、生徒指導においては、ともすれば表面的に現れた問題行動そのものへの対応といった消極的な面のみが強調されがちであった。しかし、問題行動もその行動の担い手である生徒と生活環境との間に生じたさまざまなかっとうから発生してくる心の問題なのである。したがって、生徒指導に当たる者は、表面的に現れた問題行動にのみ目を奪われることなく、生徒指導の原点に立ちかえって、生徒の内面、心に目を向けて、生徒一人一人のよりよき発達を促すような指導の充実をめざしていかなければならない」

これらの記述は、生徒指導には、人格の発達をめざす積極面の指導と、喫煙・万引き・窃盗・暴力・怠学などの問題行動に対処する消極面の指導があるということを示している。これは先に示した大西（1990）の指摘する生徒指導の「いりくんだ使われ方」を反映した記述であるともいえるし、積極面、消極面という言い方が示すように、ある意味では、生徒指導のあるべき姿と現状の姿といえなくもない。先に示した文部省の定義は、生徒指導の積極的な面を念頭に置いた定義であると考えられる。もちろん、これらの記述が消極面の指導の存在を否定しているわけではない。現実の問題行動が起こった時に、生徒の内面を理解するにとどまるのでは不十分であり、適切な対応がとられなければならないのはいうまでもないことである。しかし、また一方で、何か問題が起こった時に対応することのみをもって生徒指導であると考えべきではないということを示したものと解せよう。

#### （4）管理的・訓育的指導と教育相談的指導

また、生徒指導においては、管理的・訓育的な指導と教育相談的な指導ということがいわれることがある。例えば、大野（1997）が紹介する東京都高校長会がまとめた「高校生の健全育成をめざして—教育相談的指導を考える—」（1982）にこれらの指導が取り上げられている。「学校における生徒の指導方法には、管理的・集団的・訓育的側面と、相談的・個別的・受容的指導がある。この2つは、まさに車の両輪であり、この両者

の調和がとれていなければ、真の意味で基本的な生活習慣を身につけると同時に、自己理解を深め、主体的に自己決定のできる生徒はできないであろう。そして、この2つの指導は、一面では生活指導と教育相談という校務分掌上の役割の問題とも考えられるが、もう一步深めてみると、生徒指導の教師は厳しく、担任や相談係は暖かくというようなことではすまされず、根本的には、厳しさと暖かさ、訓育的指導性と相談的指導性とが、本来的に一人の教師の中で一本化していなければ、真に生徒から信頼される教師になり得ないということが考えられる」

ここでは、分掌としての生活指導が訓育的な指導を、教育相談が受容的な指導を担当するように書かれている。先の記述との関わりでいえば、積極的な生徒指導がここでの教育相談、すなわち受容的な指導に、消極的な生徒指導がここでの生活指導、すなわち管理的・訓育的指導に重なる部分が多いと思われる。両者はいずれも指導の対照的な側面を表しているものといえるだろう。この文書においては、両者は、車の両輪に例えられている。すなわち、両方とも必要なものであり、それぞれは別のものであるという考え方といってよいであろう。しかし、両者は一人の教師の中で一本化していることが重要であるという。この指摘は肯首できるものである。しかし、両者が車の両輪だとすると一本化が難しいとも考えられる。この点についてはこれまでに考えを述べた（高柳、1997）が、一本化することは可能であると考えられる。

管理や訓育という力づくの指導を思い浮かべ、否定的な感情を持つこともあると思われる。もちろん、これだけは絶対に譲れないという気迫というか迫力が必要とされる場面は当然あると思われるが、威嚇や暴力を背景にしなくては管理や訓育ができないというわけではない。生徒は、社会化の過程で、社会には守るべき規範もあり、世の中は全てが自分の思い通りにことが運ぶわけではないという現実原則を受け入れることも必要である。しつければ、生徒が属する社会で好ましいとされる行動様式を身につけることであると捉えれば、このことを文化の伝承という枠組みの中で改めて見直すことができると思われる。一方、受容というと、相手の言いなりになったり、非を是認するような受け身一方のイメージで受け取られる場合があるようだが、本来はそういうことをいうのではない。見て見ぬ振りをすることは、見捨てているということであって、その生徒を受容していないことである。同様に、一方的に怒鳴りつけるだけで、双方向性のない叱責なども受容的でないといえよう。非行など生

徒がその場に応じた適切な振る舞いができないと、そうであってはいけないと思うあまり、その存在までも否定してしまうことがありうる。教師の生き方、考え方の枠組みから生徒の行動、考え方が外れていても、まずは現実の生徒の姿から目を背けないこと、それが受容するというこの意味である。また、受容しつつも非は非として指摘し、適切な行動の仕方をするよう場に応じた指導することは、受容とともに必要な指導・援助であり、受容的な態度と矛盾しないで行い得るものと思われる。両者が相俟ってより効果的な指導が行われると考えられる。

#### (5) 訓育と生徒指導

ここで、もう少し、訓育と生徒指導の関係について検討しておきたい。今日、訓育というと、しつけに類する語として、望ましくない行動を避け、望ましい行動に向かうように、強制、命令、指示、訓練、賞罰、訓戒、説得などの方法を用いることとして理解されていることも少なくないと思われる。このように理解した場合、訓育は、消極的な指導、或いは、管理的な指導と結びついたイメージで捉えられやすいのではないかと考えられる。

ところで、生徒指導の概念は、「ドイツのヘルバルト(Herbart, J. F.)にまでさかのぼることができる」(江川, 1993b)といわれている。ヘルバルトは、教育作用を管理(教授、訓練を教育作用として成り立たせるための前提で陶冶的意図を含まない)、教授(一定の文化財を媒介として間接に生徒を形成する作用)、訓練(教師が子供を直接に陶冶する作用。主として道徳的性格形成をめざす)の3つに分け、「教育の究極の目的は意志の教育であるところの訓練にあり、管理、教授はいずれもそのための手段であると考えた」(細谷, 1980)。ヘルバルトのいう管理とは、教育活動の展開に障害となる要素や条件を除去する作用、別の言い方をすれば、子供が教育活動に集中するために注意を呼び起こすという、本来消極的な活動のことであった。ヘルバルトは、その方法として監視や威嚇や罰をあげており、これからすると、管理的な指導のイメージに重なるが、その一方では、子供が遊戯や学習作業に熱中している場合には結果的に管理がよく行われているとして、後に、管理の方法として作業もとりあげた。つまり、必ずしも、監視や威嚇や罰といったある意味での強い指導がなくとも、教育活動に集中させることが可能な場合があるということである。管理主義といった場合には、管理という言葉にはあまりいいイメージが伴わないように思われるが、健康管理や品質管理といった場合には、管理という言葉に対してそう抵抗感がないように思われる。管理や訓育といった場

合、しばしば、ある特定の方法がイメージとして強く付随しているのではないかという印象がある。例えば、ヘルバルトは管理の方法として監視や威嚇や罰を挙げたが、管理や訓育は、そのような方法を常に伴うものというイメージがないだろうか。先に述べたように、管理・訓育的な指導、消極的な指導も不要というわけではない。ヘルバルトが作業を管理の方法として挙げたように、管理や訓育の目的を達するために、拒絶感を与えない方法が検討される時期が来ているように思われる。

ちなみに、ヘルバルト派のライン(W. Rein)は、後に管理と訓育を合わせ、更に養護を加えて指導としたが、この考えが19世紀末にアメリカのヘルバルト学派にも引き継がれた。その際、アメリカのデ・ガモ(C. DeGarmo)は教授をinstruction、指導をschool discipline(ヘルバルトのいう管理に重点を置いた訳)とかguidance(ヘルバルトのいう訓練に重点を置いた訳)と訳している。

日本では、明治中期にヘルバルト派の教育学も導入されたが、既に「生徒心得」に示されるような罰則や採点が付随する管理主義的性格の強い訓練観が存在しており、管理と一本化されるなど、ヘルバルトの訓練論は修身教育の強化や合理化のために変容させられていった経緯がある。明治時代後期や大正時代になり、子供の自治を重視する見解や、先に述べたような生活指導の発展も見られたが、大正昭和期においては、国家主義教育体制を背景とする管理主義的な訓育論が支配的であったといえる。第二次大戦後、アメリカのガイダンスが紹介されたが、その啓蒙期を過ぎると、その実践は停滞するようになった。日本の学校教育には、訓育の強い伝統があった反面、援助やサービスといった教育活動は低調だったのである。

#### (6) 生徒指導とガイダンス

今日の生徒指導の基本的な骨格は、第2次大戦後の翌年、アメリカのガイダンスの理論や実践が導入されて作られてきたのであるから、ガイダンスについてもふれておく必要がある。生徒指導で人格の発達をめざす積極的な指導が重視されるのも、その根底にガイダンスの考え方があるからとも考えられる。

ガイダンスの理論の発展は、20世紀初等のアメリカにおける職業指導運動に端を発している。すなわち、資本主義の発達とそれに伴う社会の構造変化(都市への人口集中、周期的恐慌や失業、社会主義・博愛主義などのめげえ、教育水準の向上など)を背景に、まずは、青少年の職業生活への適応指導を施す職業指導ないし進路指導の理論として発達した。その先鞭をつけたのが、「職業

の選択』（1909）を著し、ボストンでセツルメント活動に従事していたパーソンズ（F. Parsons）である。その後、各学校段階に広く普及するにつれ、子供を現実の生活によりよく適応させ、更に進んでは、個性に応じた自己実現を援助するための一般理論へと発展していったのである。この性格が、今日の生徒指導の基本的な性格を形作っていると考えられる。

国分（1990）は、ガイダンスとは「①カウンセリング、②心理テスト、③進路相談・就職指導、④生徒に関する記録類の作成と保管、⑤リサーチ（生徒の実態調査）、⑥情報提供」の六つのサービスを意味していると述べている。飯田（1980b）は、児童・生徒指導の主な仕事として「常に児童・生徒の理解に心がけること（たとえば、観察、調査、検査など）、教師と児童・生徒間および児童・生徒同士の間にも民主的な好ましい人間関係をつくり、それを保持するするように努めること（たとえば、いわゆる学級づくりなど）、コース（在学中の学業上のコースおよび将来の進学上や就職上のコース）の賢明な選択ができるように助言したり、学業上や生活上の悩みの解決について援助したりすること（たとえば、教育相談など）、また、いわゆる問題行動（非社会的行動や反社会的行動）に対する治療を配慮したりすること（たとえば、各種医療機関や青少年健全育成期間や青少年保護育成機関その他との協力など）などが考えられる」と述べている。また生徒指導の領域として、坂本（1987b）は、学業指導（学習の意欲や習慣の育成、学業不振の解消、教科やコースの選択指導、入学時オリエンテーション等）、適応指導（新入学や転校など新しい環境に適応できない生徒や個人的な悩みを持つ生徒の指導）、社会性指導（責任、自由と協調、公衆道徳と社会参加などの態度獲得のための指導）、道徳性指導（日常の基本的行動様式、人間尊重の精神、道徳性の発達と社会の一員として社会を建設することの指導）、進路指導（生き方の指導）、保健指導（健康、安全、性についての指導）、余暇指導（余暇活動の選択、価値的利用や休養の指導）の7つを挙げている。江川（1993a）も、学業指導、進路指導、個人的適応指導、社会性指導、余暇指導、健康・安全指導の6つ（内容は、坂本と同様）を挙げている。これらは、国分のいうガイダンスのサービス領域にほぼ重なるものと考えてよいであろう。

#### （7）教育課程と生徒指導

生徒指導も学校における教育活動の一つであるから、その目的を達成するため、計画的・組織的に実施されることが必要である。従って、各学校が編成する教育計画

である教育課程（教育目標を達成するため、国の定める基準やこれに基づき地方の教育委員会で定める規則等に従って編成される）との関係についても理解しておくことが必要であろう。

学校での教育活動は、教育課程を展開することにより行われる。教育課程の展開により得られる機能（働き）として中心的なものが、学習指導であり、生徒指導である（『生徒指導の手引き（改訂版）』、1981b）。江川（1994）が生徒指導の形式的な定義として「学習指導以外のいっさいの指導のことである」と述べたのは、こうした意味合いを含んでいると思われる。

また、『生徒指導の手引き（改訂版）』（1981c）に「生徒指導は、学校がその教育目標を達成するための重要な機能の一つである」と書かれているように、今日では、生徒指導は、一般的には、機能として理解されている。生徒指導が機能であるということは、坂本（1987c）が「生徒指導の特質は、それが『機能』であるということにある。言い替えば、それが『領域』でもなければ、『内容』でもないということである。生徒指導は、どんな領域に対しても、またどんな指導内容に対しても、作用するものである。すなわち、生活のあらゆる場に作用するものである」と述べているように、特定の領域や内容に限定されることなく、教育課程のあらゆる場面で働き、更には、教育課程だけでは足りないところを補う役割を持っているものだということができる。例えば、学業指導や適応指導などの領域の生徒指導が適切に行われることで、教科の指導が円滑に進むことが考えられる。また一方では、教科や特別活動の目標や内容に生徒指導のねらいとするものが含まれていたり、その展開のうちに生徒指導の機会が見いだされることがあるなど、教育課程の内容が生徒指導に直接、間接に貢献することもある（『生徒指導の手引き（改訂版）』、1981d）。このような、教育課程と生徒指導の密接な関係を理解しておくことが、それぞれの展開・指導を進める上で重要であると思われる。

### 3. おわりに

以上、「生徒指導の意義」を理解する上で、取り上げることが必要であると思われる項目と、その内容について検討を加えてきた。

生徒指導というと、問題行動が起こった時に強い指導を行ったり、問題行動が表面化しないように指導を行うなど、いわゆる消極的な生徒指導のイメージが今でも強いのではないかという印象を受けることがある。いわば

治療的というか対症療法的な生徒指導である。こうした指導も、先にも述べたが、現実的には必要なものであると思うけれども、その一方で、育成的というか開発的ともいうべき生徒指導についても、議論や論考が積み重ねられていくべき時期にきていると思われる。

生徒指導の重要性がますます認識されてきた背景には、生徒の全人的な発達への配慮ということもあるだろうし、いじめ、不登校、中途退学、校内暴力、非行、学級崩壊などといった、学校の在り方が改めて厳しく問い直されるような問題が起こっているという現実的な要請もあるだろう。教科指導に専念するだけでは十分といえないのが今日の学校の姿であるといつてよいと思われる。

ここに、生徒指導の意義を改めて検討することの意義がある。生徒指導を巡って、管理、訓育、ガイダンス、教育相談的指導、共感、傾聴、指導、援助など様々な言葉が使われるが、改めて、それらの言葉を見直してみることも大切なのではないかと考えている。例えば、強い指導、厳しい指導とは力づくの指導でしか実現しないのか、他の方法はないのか考えてみたり、自己指導能力を育てることの重要性は十分理解できるが、具体的にどのような指導・援助を行えばその能力を育成できるのかといったことなどを検討し、実践することが必要とされていると思われる。今回取り上げた指導内容を踏まえ、今後も、指導内容やその取り扱いについて、一層の検討を加えていきたいと考えている。

#### 引用文献

- 江川政成 1993 「生徒指導」 原野広太郎編著『生徒指導・教育相談・進路指導（中・高校用）』 日本文化科学社 a : pp. 58-60 b : p. 54
- 江川政成 1994 「生徒指導(guidance)」高野清純監修『事例 発達臨床心理学事典』福村出版 p. 55
- 原野広太郎 1993 「生徒指導・教育相談・進路指導」原野広太郎編『生徒指導・教育相談・進路指導』日本文化科学社 P. 1
- 細谷俊夫 1980 『教育方法第3版』 岩波書店 p. 6
- 飯田芳郎 1980 「学校における児童・生徒指導」吉本二郎・真野宮雄・宇留田敬一編『新教育を創造する学校経営第四巻全教職員が担う児童・生徒指導の経営』東京書籍 a : pp. 59-60 b : p. 56
- 国分康孝 1990 「ガイダンス」 国分康孝編『カウンセリング辞典』誠信書房 p. 73
- 文部省 1981 『生徒指導の手引き（改訂版）』大蔵省

印刷局 a : pp. 6-7 b : pp. 71-75 c : p. 1  
d : pp. 75-89

- 文部省 1988 『生徒指導資料第20集 生徒指導研究資料第14集 生活体験や人間関係を豊かなものとする生徒指導—いきいきとした学校づくりの推進を通じて— 中学校・高等学校編』 大蔵省印刷局 p. 1
- 大西忠治 1990 『生活指導入門』 青木書店 pp. 4-5
- 大野清一 1997 「学校教育相談とは何か」 カウンセリング研究第30巻第2号 日本カウンセリング学会 p. 163
- 坂本昇一 1987 a 「指導の考え方」 深谷昌志編著『青少年の指導』放送大学教育振興会 p. 20
- 坂本昇一 1987 b 「指導の領域と内容」 深谷昌志編著『青少年の指導』放送大学教育振興会 p. 34
- 坂本昇一 1987 c 「指導の機能と体制」 深谷昌志編著『青少年の指導』放送大学教育振興会 p. 41

#### 参考文献

- 浅野誠・竹内常一 1975 「生活指導」 広岡亮蔵編『授業研究大事典』明治図書 pp. 372-373
- 井上治郎 1977 「生活指導」 井上治郎・下村哲夫・佐々木俊介編『現代教育原理』文教書院 pp. 96-115
- 木下繁也 1971 「生活指導〈大正・昭和前期〉」 海後宗臣監修『日本近代教育史事典』平凡社 pp. 404-405
- 児玉三夫・吉田昇 1971 「生活指導〈第二次大戦後〉」 海後宗臣監修『日本近代教育史事典』平凡社 pp. 406-408
- 国分康孝 1987 『学校カウンセリングの基本問題』誠信書房
- 宮坂哲文 1962 『生徒指導の基礎理論』 誠信書房
- 野淵龍雄 1980 「生徒指導」高倉翔・高桑康雄・牧昌見編集『現代学校経営用語事典』第一法規 p. 211
- 高桑康雄 1971 「生活指導〈明治前期〉〈明治後期〉」 海後宗臣監修『日本近代教育史事典』平凡社 pp. 402-404
- 高柳真人 1997 「カウンセリングマインドに基づく担任の学級経営—しつけと受容をどう考える—」 『指導と評価』図書文化 十月号 p. 32